

# 『とはずがたり』論

－ 「憂き身」意識に注目して －

김 선 화\*

(e-mail: ohana@mokpo.ac.kr)

---

## 目次

---

1. 始めに
  2. 「数ならぬ身」
  3. 中世の「旅する女」
  4. 遊女との共感
  5. 終りに
- 

## 1. 始めに

『とはずがたり』には作者後深草院二条の言葉として自分は「数ならぬ身」であると繰り返し叙述されている。二条の「数ならぬ身」はどのような状況で語れているのか。そしてこの認識は二条の生き方とどう関わっているのかについて考察する。特に出家した後、お寺で定住するのではなく、旅する姿が描かれている修行編で二条の「憂き身」意識はどのような形として表出しているのかに注目する。

中世の女性の中で「旅する女」の代表者として挙げられるのは、阿仏尼と後深草院二条である。阿仏尼の『十六夜日記』には、阿仏尼が家領細川荘の処分をめぐる紛争を解決する目的で旅をしている姿が描かれている。

『とはずがたり』の二条はなぜ旅するのであろうか。二条の旅と関わり、高木美智子が「『西行が修行の記』を見て憧れたことによる二条の西行摂取は、西行の生き方や和歌の詠み方、修行の旅の仕方など様々に認められる<sup>1)</sup>」と指摘しているように、二条の旅は

---

\* 木浦大学校 副教授 日本中世文学専攻  
『とはずがたり』の本文引用は新潮日本古典集成（福田秀一校注、1978年）による。

西行という遁世者の生き方に憧れた、西行のような生き方を模倣した旅であることを否定することはできない。

しかし、ここで考えてみたいのは、二条の憧れの対象が男性である西行という点から、女性である二条の旅の現実はどうであったのかということである。「旅する女」である二条の現実における旅は、憧れた西行を理想とした旅とは異なると思われる。

二条が過去宮廷女性であったという点での二条の旅の独自性は、二条が定住する生き方を望みながらも、修行の形が旅でなければならぬ必然性と深く関わる<sup>2)</sup>。

本稿では『とはずがたり』に描かれる「数ならぬ身」「憂き身」意識を分析し、男性である西行とは異なる、二条という女性が抱いている旅の意味があるとすればそれは何であろうかについて考察する。

## 2. 「数ならぬ身」

『とはずがたり』には二条が自分自身を「数ならぬ身」として認識する場面が頻繁に叙述される。ここでは「数ならぬ身」の場面に注目して二条が認識する「憂き身」意識について考察し、また「憂き身」意識が出家後の修行編ではどのような形として表出しているのかについて分析する。

『とはずがたり』の中で最初に「数ならぬ身」が語られる場面は粥杖事件の時である。正月の行事で後深草院が公卿達に女房達の尻を打たせたことに対して、二条と東の御方による院への報復の事件である。粥杖事件を起こし、その罪科が問われた場面で二条は次のように語る。

身、数ならず候へば、思ひ寄る方なく候ひしを、東の御方、『この恨み思ひ返し参らせん、同心せよ』と候ひしかば、『さ承り候ひぬ』と申して、打ち参らせて候ひし時に、われ一人罪に当たるべきに候はずと申せども、（中略）（2巻、97）

ここでの東の御方は後深草院皇子の生母であることから、二条は東の御方に比べて、自分のことを「数ならぬ身」として認識している。

1)高木美智子、「『とはずがたり』の「離別と再会」について—『西行物語』との共通点より—」、「香椎潟」第44号、福岡女子大学国文学会、1999年、77頁。

2)拙稿「『とはずがたり』研究—二条の〈旅〉の独自性について—」古代文学研究 第2次 第13号、2004年、64頁。ここでは二条の旅は院という王と関わった、過去に宮廷女性であることが前提で行われた旅であり、出家後も院のために活動しており、二条の信仰の中心には常に院という王の存在があることを述べた。

また、有明の死後に交わされた院との贈答歌の中でも「数ならぬ身の憂きことも面影も一方にやは有明」と詠じて、二条が常に自分のことを「数ならぬ身」とする「憂き身」への意識が窺える。

この「数ならぬ身」が二条自身について以外の場面で使われるのは、院に忘れられた女性（傾城—「ささがにの女」）の逸話である。

「浅茅が末に惑ふ蜘蛛」と書きたる硯の蓋に、縹の薄様に包みたる物ばかり据ゑて参る。御覧ぜらるれば、「君にぞ惑ふ」と彩みたる薄様に、髪をいささか切り包みて、  
数ならぬ身の世語りを思ふにもなほくやしきは夢の通ひ路  
かくばかりにて、ことなる事なし。「出家などしけるにや。いとあへなき事なり」とて、たびたび尋ね仰せられしかども、終に行き方知らずなり侍りき。年多く積りて後、河内国更荒寺といふ寺に、五百戒の尼衆にておはしける由聞き伝へしこそ、まことの道の御しるべ、憂きはうれしかりけん」と推し量られしか。（2巻、115～116）

同じ日、別の女を招いていた院は自分が召した「ささがにの女」の存在を忘れてしまい、「ささがにの女」は一晩中、雨の中を車のまま待たされて、ずぶぬれになってしまう。翌朝、院はようやく「ささがにの女」の存在を思い出して招いたが、院の文に対し返事はせず、自分の髪を切り包み、「数ならぬ身の世語りを思ふにもなほくやしきは夢の通ひ路」と、歌を書いて自分の心境を表明し、出家の意志を示している。それは女楽事件での二条の琵琶の絃を切り包み、自分の心境を「数ならぬ身」と表明した場面と重なる。時間が過ぎてからこの女性が「河内国更荒寺といふ寺に、五百戒の尼衆にておはしける」という噂を聞いた二条は「まことの道の御しるべ、憂きはうれしかりけん」と彼女の出家遁世を語っている。二条はこの「ささがにの女」の出家遁世について、院に捨てられたことによる憂き思いがかえって仏道に入る機縁となったのを羨ましがっている。

二条は女楽事件で隆親に対する反発から宮廷を出奔する時、琵琶の第一絃を二つに切ったのを包み、これを添えて

数ならぬ憂き身を知れば四つの緒もこの世の外に思ひ切りつつ  
と書き置きて、「御尋ねあらば、都へ出で侍りぬと申せ」と申し置きて、出で侍りぬ。（2巻、119）

と、院宛の手紙に書いている。二条は明石上の琵琶の役で参加するようになったが、最初から「何ぞしも必ず、人よりことに落ちばなる明石になる事は」と、この役に不満であった。隆親の娘である今参りが当日に家紋を入れた網代車で参るのをみて、父在世中の昔のことが思いだされ寂しかったと語る。女房の座を決める所きた隆親が自分の娘、今参りを上

座にしようとした不条理に対する抗議であった。ここで注目されるのは二条が自分のことを、「数ならぬ身」であると認識していることである。

「ささがにの女」と二条の「数ならぬ身」は院宛ての歌の中であることから、帝にとって自分は物の数にも入らないという「数ならぬ身」として意識している。またそのような自分の境遇を「憂き身」として意識して、その「憂き身」意識を仏道に入る機縁として受け入れるのである。ここでの「ささがにの女」の逸話を通して「数ならぬ身」と「憂き身」が繋がるのである。加賀元子は和歌での「数ならぬ身」の用例を分析した上、「この語は和歌においても常套的に用いられる語ではあるが、『とはずがたり』においては二条の自己を認識した語であり、宮廷生活時代においてはその処遇からくる無力さ、立場の不安定さを実感し、出家後は社会的に無力な出家者という自己の立場を感じている際に発せられる語である<sup>3)</sup>」という指摘は示唆的である。

二条の「数ならぬ身」が語られるもう一つの箇所は修行編での東二条院の死と関わる場面である。

数ならぬ身の思ひにも、比べられさせおはします心地し侍りしか。今はの御幸を見参らするにも、昔ながらの身ならましかば、いかばかりかなど、おぼえさせおはしまして、さてもかく数ならぬ身は永らへて今はと見つる夢ぞ悲しき (5巻、299)

宮廷時代には東二条院から嫌われ何かと敵視された関係にもかかわらず、東二条院が病気であることを聞くとひたすら同情し、しかも「さてもかく数ならぬ身は永らへて今はと見つる夢ぞ悲しき」と、東二条に対して自分のことを物の数でもない「数ならぬ身」であると語るなのである。即ち二条は東二条院という正妃に比べて自分の身を語る時「数ならぬ身」であると認識しているわけである。

また、自分の人生を支配したとも言える院が病気であることを聞き、二条は石清水八幡宮に籠って院の無事を祈り、「夢ならでいかでか知らんかくばかりわれのみ袖にかくる涙を」と、そのように院のために祈る自分を夢の中でも院に知らせたいと語る。

このような院への思いは自分の命に代わって院を救いたいと思う「わが命に転じ代へ」で絶頂に達する。院の容態が危篤であることを聞き、一度院を拝見したいという思いから、西園寺実兼の計らいで対面することになる。二条は「わが命に転じ代へ給へ」と祈り、自分の願いが成就して、院の病気が回復し、その代わりに自分が亡くなったならば、「君故にわれ先立たばおのづから夢には見えよ跡の白露」と、院の命に取り換えられたことを、院の夢の中でも知らせてくれるように願うのである。結局二条の「わが命に転じ代へ給へ」の願いは受け入れられることなく院は崩御してしまう。夢を信じる中世人の思惟<sup>4)</sup>がこの背景にあ

3)加賀元子、「『とはずがたり』「数ならぬ身」考」『とはずがたり』の諸問題、和泉書院、1996年、98頁。

と思われる。

二条の願い「わが命に転じ代へ給へ」は二条の「数ならぬ身」の「憂き身」意識と深く関わるとされる。二条は「数ならぬ身なりとも、さしも思ひ侍りし事の叶はで、今まで憂き世にとどまりて」と、院の命に代れたらとあれほど思ったことが叶わなくて、自分は憂き世に止まることを歎いているのである。その心境を示すのが、院の葬送に際して三井寺の証空阿闍梨の説話を想起する一節である。

三井寺の常住院の不動は、智興内供が限りの病には、証空阿闍梨と言ひけるが、「受法恩重し。数ならぬ身なりとも」と言ひつつ、清明に祀り変へられければ、明王、命に代りて、「汝は師に代る。われは行者に代らん」とて、智興も病止み、証空も命延びけるに、(5巻、308~309)

証空が師匠智興の病気の時に「数ならぬ身」であるわが命に替えるように晴明(平安中期の陰陽師)に頼んで、病気を証空に移すよう祈祷したところ、その願いが受け入れられて智興も病気が治り、証空も救われたという説話である<sup>5)</sup>。この証空の泣き不動説話は、既に巻一の東二条院御産の時、「証空が命に代わりける本尊にや、絵像の不動御前にかけて」とあり、その時、生まれたのが、遊義門院であった。それと呼応するようにここでは君の恩は証空が智興から受けた恩よりも深かったにもかかわらず、自分の「わが命に転じ代へ給へ」という願いが空しくなったことを歎く姿が述べられている。この証空の身代りの説話を介して二条について度々表明される「数ならぬ身」との認識と「わが命に転じ代へ」とが結びついてその意味が生きてくるとされる。

### 3. 中世の「旅する女」

今まで「数ならぬ身」が語られる場面に注目して分析したが、ここでは二条の旅する姿が描かれている修行編を中心に二条の「憂き身」意識について考える。特に中世女性の旅の特徴について考え、二条の「憂き身」意識との関連性について考察する。

二条の旅は『とほずがたり』の中では同行者があったというふしがみられる。江島で出会った人から貝などを御馳走してもらったお礼として、二条は「供とする人の笈の中より、都のつとて扇など取らすれば」と言っている。

4)西郷信綱、「夢を信じた人々」、『古代人と夢』、平凡社、1972年、9頁。

5)この泣き不動説話は『今昔物語集』巻第一九、『発心集』巻第六、『宝物集』巻第三、『三国伝記』巻九(六)にも見える。

当時の貴族女性の旅は一人の旅ではなく、多くの使用人（同行者）がいることが知られている。二条の家門の背景を考えると、二条が同行者なしで、一人で旅するのはこの時代の現実としては考えられない。しかし二条の旅の部分で江島での「供とする人」以外には同行者のことは全然言及されていない。善光寺では同行と別れて一人残る場面が描かれている。二条は最初は大勢の人々と同行するが、途中から「宿願の心ざしありてしばし籠るべき由を言ひつつ、歸さにはとどまりぬ。」と言って敢えて一人だけで残る。そして二条は一人残る理由として「中有の旅の空には誰か伴ふべき」と言って、結局人間は一人であることをあえて強調している。ここでの描写から二条の旅は一人旅であるかのように描かれているが、二条の身分と家門を考えると、何等かの同行者はあったと思われる。しかし、二条にとって同行者はただの旅のお供であるだけで、自身の悩みを分かちあう旅の人数（同行）には入っていない。即ち二条の認識の中では「一人旅」という認識であったと思われる。

『とはずがたり』には女性の一人旅の危険性も描かれている。二条が東国下向の旅をした後、永仁元年（1293年）頃、伏見で後深草院と再会した際に、後深草院が二条の旅姿について質問している部分である。

「さても、この世ながらの程、かやうの月影は、おのづからの便りには必ずと思ふに、遙かに竜華の暁と頼むるは、いかなる心の中の誓ひぞ。また、東・唐土まで尋ね行くも、男は常のならひなり、女は障り多くて、さやうの修業叶はずとこそ聞け。いかなる者に契りを結びて、憂き世を厭ふ友としけるぞ。一人尋ねては、さりともいかがあらん。（4巻、296）

傍線部は、主に女性の旅の身体的な危機感について示唆していると言える。院は二条に執拗に旅について尋ね、二条が他の男性と契りを結んだかどうかについて追及しようとしている。この質問に答え、二条は

あちこちさまよひ侍れば、或る時は僧坊にとどまり、或る時は男の中にまじはる。三十一字の言の葉をのべ、情を慕ふ所には、あまたの夜を重ね、日数を重ねて侍れば、あやしみ申す人、都にも田舎にもその数侍りしかども、修行者と言ひ、梵論梵論など申す風情の者に行きあひなどして、心の外なる契りを結ぶためしも侍るとかや聞けども、さるべき契りもなきにや、いたづらに独り片敷き侍るなり。（4巻、278～279）

と説明している。ここでは当時の女性の旅の姿が集約されている。後深草院の質問と二条の答えから当時の女性の旅の姿を考察することができる。後深草院の質問と二条の答えから、当時の女性の一人旅がかなり行われたこと、そしてその際、修行者や遍歴する男性と契りを結ぶためしのあったことを確認することができる。しかし、二条自身はそのようなことも

なく「いたづらに独り片敷き侍るなり」と自分の潔白を主張している。

女性の旅が男性の旅より難しい点は性に関わる部分であり、それと最も具体的に問題になるのは宿泊の問題であろう。二条の場合は僧坊に止まったり、あるときは男の中にまじったりしたと言っている。二条が「あるときは男の中にまじったりした」というような男女の区別がない雑魚寝の場合も少なくなかったであろう。

一人の女性の旅では、一応は尼姿によって性的な危険からは保護される面があったが、実際にそのような規則が守られていたかどうかはわからない。二条の旅の姿はどうであったのであろうか。

『とほすがたり』の宮廷編には二条の衣装についての描写が詳しく描かれている。『とほすがたり』最初の部分でも「蒼紅梅にやあらん七つに、紅の桂、萌黄の表着、赤色の唐衣などにてありしやらん。梅唐草を浮き織りたる二つ小袖に、唐垣に梅を縫ひて侍りしをぞ着たりし」と二条の服装を語ることで始まっているし、終始二条の衣装について詳しく記述する認識がみられる。

しかし、出家・遁世を描いている修行編では二条の旅の姿についての描写は全然描かれていない。勿論尼姿であるから特別に書かなかつたのかもしれないが、宮廷編では丁寧に自分の衣装についてこだわりと言っていいような記述が見られたにもかかわらず、修行編では自分の姿についての記述が全然みられないのである。

次にあげるのは、「旅する女性」二条に実際に身の危険が及んだという部分である。

江田といふ所に、この主の兄のあるが、女よすがなどありとて、「あなたさまをも御覽ぜよ。絵の美しき」など言へば、この住まひもあまりにむつかしく、「都へは、この雪に叶はじ」と言へば、年の内もありぬべくやとて、何となく行きたるに、この和知の主、思ふにも過ぎて腹立ちて、「わが年ごろの下人を逃したりつるを、厳島にて見つけてあるを、また江田へかどはれたるなり。打ち殺さん」など、ひしめく。(5巻、294)

この場面は二条が備後の和知の領主の所に泊まった時、この領主の下人とされようとした部分である。二条はこの時、江田にいる兄とその伯父である鎌倉での知人広沢入道の助けで、この危機から逃れることができた。二条はこの事件についてつぎのように言っている。

さても、不思議なりし事はありぞかし。この入道下りあはざらましかば、いかなる目にかあはまし。主にてなしと言ふとも、誰か方人もせまし。さるほどには、何とかあらまし、と思ふより、修行も物憂くなり侍りて、永住みして時々侍る。(5巻、297)

下人に間違えられたかも知れない旅の現実から、二条は修行の難しさを述べている。ここで考えられるのは二条の旅の姿についてである。二条の旅の姿ははっきりとは描かれてい

ないものの、他人からは下人に間違えられるほどの姿であったかも知れない可能性が考えられる。

ここでは二条の経済力について考えてみたい。次は二条が旅の中で、自分の宿願成就のために親からの形見を手放している場面である。

われ二人の親の形見に持つ、母に後れける折、「これに取らせよ」とて、平手箱の鴛鴦の丸を蒔きて、具足・鏡まで同じ文にてし入れたりしと、また梨地に仙禽菱を高蒔に蒔きたる硯蓋の、中には「嘉辰令月」と手づから故大納言の文字を書きて、金にて彫らせたりし硯となり。一期は尽きるとも、これをば失はじと思ひ、今はの煙にも友にこそと思ひて、修行に出で立つ折も、心苦しきみどり子を跡に残す心地して、人に預け、帰りては先づ取り寄せて、二人の親に会ふ心地して、手箱は四十六年の年を隔て、硯は三十三年の年月を送る。名残いかでかおろかなるべきを、つくづくと案じ続けるに、人の身に命に過ぎたる宝、何かはあるべきを、君の御為には捨つべき由を思ひき。(5巻、310)

二条は宿願のため、何よりも宝であった二人の親の形見を手放している。また院からもらった小袖も供養のため手放している。以上の記述からわかるように二条の旅の実像は、宮廷で二条が絵巻などから思い描いていた、西行のように、心穏やかに、俗世を離れる姿とは落差があったのではないか。それは二条が女性であるため経験しなければならない「旅する女」の難しさや、絵巻や物語からは想像することのできなかった現実的な問題、端的には経済力の問題などが深く関わっていると思う。二条の旅の姿の客観的な描写が描かれておらず、その具体的な様相を伺うことができないのも、このような問題と関わるのではないか。

次の部分は二条の旅の実像を窺い知ることができる部分である。

由比の浜といふ所へ出でて見れば、大きな鳥居あり。若宮の御社遙かに見え給へば、他の氏よりはとかや誓ひ給ふなるに、契りありてこそさるべき家にと生れけめに、いかなる報いならんと思ふほどに、まことや、父の生所を祈誓申したりし折、「今生の果報に替ゆる」と承りしかば、恨み申すにてはなけれども、袖を拡げんをも嘆くべからず。また、小野小町も衣通姫が流れといへども、簀を肘にかけ、蓑を腰に巻きても、身の果はありしかども、「わればかり物思ふ」とや書き置きしなど思ひ続けても、先づ御社へ参りぬ。所のさまは、男山の景色よりも、海見遙かしたるは、見所ありとも言ひぬべし。(4巻、234～235)

ここでの二条の嘆きは名門の子孫として生まれたにもかかわらず、流浪生活をするしかない自分の人生の辛さからくるものである。二条は自分の父親の後生のために自分のこの世での幸せを犠牲にしていると言っている。ここで注目しなければならないのは二条が小野小町を

思い出していることである。

中世の人々にとって小野小町はどんなイメージを持っていたのか。二条が理解している小野小町とはどんなイメージであったのであろうか。引用での小野小町の零落した姿は『玉造小町子壯衰書』によるものが知られている。『玉造小町子壯衰書』という作品は、小野小町をヒロインにしたとされた古詩で、一人の女性の栄光から衰亡に至る境涯を辿って、現世の無常を説く唱導作品である。中世人にとって小町は絶世の美人で、若い時、多くの男の求婚を斥けて、帝の寵を得ることをねがったが、その後両親の死によって流浪する女性のイメージである。そして、このような悲しい境涯を克服するため仏の救済を求める存在としての小町である。

このような小町のイメージは女であることゆえの憂さを基盤にした当時の女性一般の身の憂さを象徴する存在であるといえる。二条は自分の流浪の境遇を小野小町に投影していると言える。『とほずがたり』のこの部分の叙述について、今関敏子は「小町への関心は、零落と流浪という二条の旅の現実の反映である<sup>6)</sup>」と指摘している。

二条の現実の旅は小野小町のような零落した、落ちぶれた姿ではないが、二条の念頭に小町のイメージがあったのは確かである。二条は、若い時に多くの男性に愛されたが、父母兄弟を失ってしまった女性の末路を象徴する存在としての小町を思い出して、それに自分の姿を重ねている。「旅する女」としての二条の心情について、寺尾美子は「西行への憧れは明るい夢であり、(中略)小町への同化は暗い現実である<sup>7)</sup>」と述べている。確かに二条の旅は西行を理想とした漂泊する遁世者に倣った旅であったが、二条が女性である点から男性とは違う、社会的な制約があったのは否定することができない。そして、二条の旅の現実を照らす存在として、物語化された伝承上の小町の姿が二条の念頭にあったのも確かである。

## 4. 遊女との共感

今まで修行編に描かれる二条の旅の実像について考察した。ここでは修行編で出家・遁世した二条が旅先で出会う人々の中で一番共感する存在として描かれている遊女に注目する。二条の旅の生活が始まる巻四の部分と巻五の部分で、二条は遊女の姿に心を魅かれている。次は既に出家した後に旅立った東国への途上における赤坂での二条と遊

6)今関敏子、「後深草院二条一〈色好み〉の出家」、『〈色好み〉の系譜』、世界思想社、1996年、144頁。

7)寺尾美子、『とほずがたり』の旅における小町幻想とその現実、『日記文学研究第一集』、新典社、1993年、369頁。

女との出会いである。

暮るる程なれば、遊女ども契り求めてありさま、憂かりける世のならひかなとおぼえて、いと悲し。(中略) 琴・琵琶など弾きて情あるさまなれば、昔思ひ出でらるる心地して、九献などらせて遊ばするに、二人ある遊女の姉とおぼしきが、いみじく物思ふさまにて、琵琶の撥にて紛らかせども、涙がちなるも、身のたぐひにおぼえて目とどまるに (4巻、228)

尼姿の二条は琴や琵琶などを弾いている遊女の姉妹と出会って、自分の宮廷生活の姿を思い出している。そして二条の出家の理由を聞く遊女の質問に、二条は自分が出家したのは恋の思いゆえであると答えている。遊女との会話で出家の理由を自ら「恋のゆえ」と答えた二条が、また「恋のゆえ」に出家した「ささがにの女」及び遊女に一番共感し、彼女達に自分の姿を照らしている。次の場面は二条の西国の旅が始まる巻五の部分で、「たいが島」での出家した遊女との出会いである。

何となく賑ははしき宿と見ゆるに、たいが島とて離れたる小島あり。遊女の世を遁れて、庵並べて住まひたる所なり。さしも濁り深く、六つの道にめぐるべき営みをのみする家に生れて、衣裳に薰物しては、先づ語らひ深からんことを思ひ、わが黒髪を撫でも、誰が手枕にか乱れんと思ひ、暮るれば契りを待ち、明くれば名残を慕ひなどしてこそ過ぎ来しに、思ひ捨てて籠りたるもありがたくおぼえて (5巻、286)

ここでは過去遊女であって既に出家した女性との出会いである。容貌を売り物として、旅人との契りを願う過去の遊女の姿と今は愛執の念を捨てて発心修行している現在の遊女の姿が描かれている。二条はそれぞれの巻四と巻五の旅の始めの部分で、遊女の生活から自分の人生を思い起こしている。遊女達は若い時、自分の容貌を売り物とし、多くの男性と契りを結んだが、今はそのような生活を罪深いと思って、出家遁世して尼となっている。

遊女達が男との一夜の契りを求めて暮らしてきた姿を、辛い世に生きるものの習いであると憐れに思った二条は、ここでは出家遁世した遊女が男との愛執の生き方を捨てて、自分たちの過去の罪について懺悔している姿に共感している。二条の旅先では様々な人との出会いが描かれているにもかかわらず、宮廷での身分高い女性との交流よりは身分低い遊女に自分を重ねている。同じ観点からたいが島の遊女たちも、彼女らが出家したということよりは、自分たちの過去への懺悔の一環として世を離れて遁世生活をしているという点で、二条の目指す生き方と共有されるべき意味を発見することができる。

二条が遊女に持つ親近感とは性の罪を犯さざるを得なかったという罪認識への共感である。そしてまた二条と元遊女とのもう一つの共通点は深い物思いになおもとわれつつ生きている姿である。これと関わって、網野善彦は「宮廷を離れたのちの女房二条の東国・西

国への旅は、まさしく「遊女」的な遍歴といっても、決して言い過ぎではあるまい<sup>8)</sup>と述べて、二条のような宮廷女性として遍歴する旅の女性と遊女との世界とが近接していることを指摘している。

二条と遊女の共通点である物思いの認識の基盤には女性は罪深い存在である仏教の五障三従説がある。即ち女性であることによる罪認識、性に関わる罪意識である。過去彼女たちが犯した罪、例えそれが生きるために犯した罪であっても、その罪から遁れるためには修行しなければならないと彼女達は思っている。

なぜ旅でなければいけないのか。若い時、自分の美貌を武器として時を過ごしてきた遊女達は、年を取って自分の武器を失った時、人生の無常観を強く感じただろう。そしてそのような無常観から離れるために尼になってさすらうのである。

馬場光子は遊女の罪認識が女であることの罪障の認識によるものであることを述べた上「女人として生きる遊女の行為は、成仏からさらに遠く、むしろ仏道に対置するものとしてとらえられている。しかし、この振る舞いこそが、遊女の生業としてあったのである<sup>9)</sup>」と指摘している。二条が遊女に感じる親しみは男達との恋愛関係からもたらされる罪意識からである。遊女たちは若い時、自分の容貌を売り物とし、多くの男性と契りを結んだが、今はそのような生活を罪深いと思って、出家遁世して尼となっている。『とほすがたり』における遊女については、加賀元子が「『とほすがたり』における遊女を考えるに、それは遊女への深い関心興味によって描かれたというレベルを超えて、根気よくあちらこちらに心を配って織り込まれた色系のように、作品全体の色調を構成する不可分な要素として存在している<sup>10)</sup>」と指摘しているように、二条と遊女の共感は大きな意味を持っていると言える。

巻四の旅のはじめの部分での憂き身に沈んだ遊女への注目と、巻五での出家遁世した遊女を描く構造は二条の姿の反映であろう。巻四の部分では宮廷での過去の自分、そして巻五には出家遁世した現在の自分の投影の意味があると考えられる。二条の修行が旅でなければならないのは、遊女が抱いている物思いへの共感とそのような物思いから離れるためにあちこちさすらう遊女の流浪性と深く関わっているからである。

## 5. 終りに

今までみたように、二条の「憂き身」意識は、自己認識として語られる「数ならぬ身」

8) 網野善彦、「遊女と非人・河原者」、『中世の非人と遊女』、明石書店、1990年、218頁。

9) 馬場光子、「遊女の祈り」、『走る女・歌謡の中世から』、筑摩書房、1992年、195頁。

10) 加賀元子、「『とほすがたり』における「遊女」—その意義—」、『武庫川国文』、1993年、10頁。

に集約していると言える。後ろ見である父大納言がなくなったにも関わらず、宮廷生活をつづけなければならない二条の不安定な立場を表していると思われる。宮廷編で二条が一番共感し同情している「ささがにの女」は帝にとって自分は物の数にも入らないという「憂き身」についての認識を表出している。「ささがにの女」への共感も二条自身も院に捨てられて、結局「ささがにの女」のように出家遁世の道へと歩むのと共通する面があるといえる。

また、修行編で出家・遁世した二条が旅先で出会う人々の中で一番共感する存在として遊女がいる。遊女との会話で出家の理由を自ら「恋のゆえ」と答えた二条が、また「恋のゆえ」に出家した「ささがにの女」及び遊女に一番共感し、彼女達に自分の姿を照らしている。同じ観点からたいが島の遊女達も、彼女らが出家したということよりは、自分達の過去への懺悔の一環として世を離れて遁世生活をしているという点で、二条の目指す生き方と共有されるべき意味を発見することができる。

二条の「憂き身」意識は、小野小町・遊女によって表現されるように、男との関係から生じる女であることからの罪意識が根底にあると言える。若い時の栄光と現在の流浪イメージの象徴である小野小町、物思いを抱いて自分の罪を懺悔しようとする遊女との共感などからわかるように、二条の旅は女であることの罪を背負っての滅罪認識の意味をも持っていると言える。

## 【参考文献】

- 網野善彦(1990)『中世の非人と遊女』明石書店 218頁  
 今関敏子(1996)『<色好み>の系譜』世界思想社 144頁  
 加賀元子(1993)「『とはずがたり』における「遊女」—その意義—」『武庫川国文』10頁  
 加賀元子(1996)「『とはずがたり』「数ならぬ身」考」『とはずがたり』の諸問題 和泉書院 98頁。  
 高木美智子(1999)「『とはずがたり』の「離別と再会」について—『西行物語』との共通点より—」『香椎鴻』第44号 福岡女子大学国文学会 77頁  
 寺尾美子(1993)「『とはずがたり』の旅における小町幻想とその現実」『日記文学研究 第一集』新典社 369頁  
 西郷信綱(1972)『古代人と夢』平凡社 9頁  
 馬場光子(1992)『走る女・歌謡の中世から』筑摩書房 195頁  
 金善花(2004)「『とはずがたり』研究—二条の<旅>の独自性について—」古代文学研究 第2次 第13号 64頁。

## 要 旨

『とはずがたり』には作者後深草院二条の言葉として自分は「数ならぬ身」であると繰り返し叙述されている。「数ならぬ身」認識はどのような状況で語れているのかに注目した。また修行編に描かれている二条の現実における旅の形を中心に中世女性の旅の独自性について考え、それが二条の「憂き身」意識とどう関わるのかについて考察した。

宮廷編で二条が一番共感し同情している「ささがにの女」は帝にとって自分は物の数にも入らないという「憂き身」についての認識を表出している。「ささがにの女」への共感二条自身も院に捨てられて、結局「ささがにの女」のように出家遁世の道へと歩むのと共通する面があるといえる。

修行編で出家・遁世した二条が旅先で出会う人々の中で一番共感する存在として遊女がいる。巻四の旅の始めの部分での憂き思いに沈んだ遊女への注目と、巻五での出家遁世した遊女を描く構造は二条の姿の反映であろう。

二条の「憂き身」意識は、小野小町・遊女によって表現されるように、男との関係から生じる女であることからの罪意識が根底にあると言える。若い時の栄光と現在の流浪イメージの象徴である小野小町、物思いを抱いて自分の罪を懺悔しようとする遊女との共感などからわかるように、二条の旅は女であることの罪を背負っての滅罪認識の意味を持っていると言える。

キーワード：数ならぬ身、憂き身、小野小町、遊女、罪

투 고 : 2012. 11. 30

1차 심사 : 2012. 12. 15

2차 심사 : 2013. 1. 5